

# 備忘録 コロナとわたしと日本人（24）

（2023年5月3日記す）

## 始めに

この原稿を書いているのは、ゴールデンウィークの真っただ中である。日差しは穏やかで、薰風が木々を渡る。オガタマが蕾をつけ始め、庭先にバナナに似た芳香がただよう。滅多にない五月晴れである。今日は久しぶりに体調がよい。

そうなると、最近の「コロナは終わった」といわんばかりの世間の風潮が気になってきた。

「行動制限なし」「マスク無用」はあまりに時期尚早だろう。

この短いメモが掲載されるころには連休も終わり、時期外れの感もあるが、一言水を差しておかげにはいられない。

## 1 コロナ禍は終わっていない

①バイデン大統領は、「パンデミック（世界的流行期）は終わった」という。欧米では人々が自由に外食を楽しみ、イベントに参加し、旅行する様子が日本でも頻繁に報道される。WHOも最近はパンデミックの終わりに言及し始めた。

②ただし、CDC（=米国疾病対策センター）のトップだったファウチ博士は退任に当たって、「コロナは終わっていない」と警告している。

まつとうな警告である。仮にコロナ禍の第1ステージ（世界的流行期）は終わったとしても、世界はそれに続く第2ステージ（地域的流行期）にある。

③日本でも第九波の襲来を警告する研究者は多い。日本もまだ「地域的流行期」にあると見なければならない。とても収束したといえる状況ではない。そう考えて対策するのが、リスク管理の常道である。

④ところが、「パンデミックの終わり=コロナ禍の終わり」と演出したい勢力がいるらしい。その最たるもののが、季節性インフルエンザ同等論者である。

だが、コロナは死亡者数の多さ、季節性がないこと、変異が大きいなど、どれをとっても季節性インフルエンザとは比べものにならない。

⑤それにも拘わらず、政府はコロナの 2 類から 5 類への変更を決めた。「コロナは軽い」「コロナは終わった」と「平時」を演出して、世論を印象操作しようとする。うすら寒い。

## 2 政府の感染データは信用できない

①政府は、昨年 9 月末からそれまでの感染データの取得方法を「簡略化」した。5 類への変更により、さらに簡略化される。

コロナの感染データは、(1) コロナ発生時から昨年 9 月末まで（第 1 期）、(2) それ以降、今年 5 月 8 日まで（第 2 期）、(3) 5 月 8 日（5 類への変更）以降（第 3 期）、の 3 つの時期に分かれる。

②第 1 期は全ての感染者数を把握できたが、第 2 期/第 3 期になると「全数把握」とか「定点把握」とカッコ付きで称されるようになる。しかし、相互の連続性はなくバラバラで、別個独立の一参考資料にすぎない。ないよりはマシだが、感染数の推移を見るには役立たない。

③（第 2 期/第 3 期の）感染者からすれば、感染を行政に報告しても大したメリットもないから、あえて報告するまでもない。実際、公表数の何倍かの感染者がいるのは治療現場の医師の常識らしい。第 2 期/第 3 期の暗数（報告されない数）は、現実値の数倍に上るだろう。

④わたしもつい数字のトリックに引っかかり、コロナ対策の手が緩みそうになる。  
それを防ぐため、わたしは第 2 期の感染者は少なくとも公表の 3 倍以上いると自戒している。新規感染者が 1 万人と発表されたら、実際には 3 万人ぐらいいると換算して、気が緩むのを警戒している。

⑤5 類移行後は、観測点は少なく公表時期も遅れるから、もはや正確な数字は把握できない。暗数がさらに拡大するのは目に見えている。新たな脅威が発生した場合、迅速な対策は不可能である。当然、第九波が来てもその予兆を掴むのは遅れる。対策は後手後手となり、かつての悪夢が再び繰り返されかねない。

⑥こうした経過をたどると、コロナ禍を軽視したい政府の意図は一貫していることが分かる。「平時」を演出して、人気をとりたい政府の方針が見え隠れする。

政府発表のデータは信じられない。あれは科学的知見に基づかないプロパガンダの類である。

そう自戒して身を守るのが賢明である。「行動制限なし」「マスク無用」のキャッチコピーに惑わされてはいられない。

### 3 命を選別する日本の集団免疫論

①国民の大多数がコロナに感染すれば、自然免疫ができてコロナは下火となり経済の回復はそれだけ早くなる。コロナ禍が始まった当時、スウェーデンはこのような集団免疫論を実施したと囁かれた。

②さらにコロナが長期化すると、英国はコロナ対策を放棄してしまう。昨年夏それまでの規制をやめ、感染データもとらず、活動制限も撤廃した。こうして経済の回復を優先した。英国は公に認めないものの、これも形を変えた集団免疫論である。

③だが、集団免疫論は、致命的な欠陥を有している。

国民の大多数が自然感染して集団免疫状態に至るまでの間に、多くの犠牲者が出ることである。結果的に、「弱者の命と引き換えに経済活動を取り戻す」ことになる。

④欧米諸国は、建前としては集団免疫論を否定しながら、衣の下から 鎧よろい が見え隠れする。「感染による免疫獲得者を増やすためには、その過程でかなりの犠牲者でても仕方がない」「パンデミックってそういうものでしょ」というわけである。これが荒々しい欧米の「不都合な真実」である。

⑤最近ではコロナの変異が続き、かつて取得した集団免疫の有効性に重大な疑問を突き付けた。1年前、2年前に獲得した集団免疫が、変異株に対してどの程度有効か誰にも分からぬ。集団免疫論の新たな弱点が見え始めた。

以上が、現在、行動の自由を謳歌している欧米の負の側面である。

⑥日本でも形を変えた命の選択がとられてきた。

政府は、一貫して検査・受診・投薬を抑制する戦略をとってきた。また、「自宅療養」と称しながら、何の治療も行わず実態は「自宅放置」をする方針をとってきた。こうして、結果

的に弱者（健康弱者、社会的弱者）は選別されてきた。

⑦この傾向は5類変更後になりますますひどくなるだろう。次の波が来た場合、かつて経験した  
ように、命の選別は肅々と、適切に、隠微に行われるだろう。

日本は、弱者を社会の片隅に追いやる。あたかも存在しないように扱う。弱者を弱者のまま  
社会の重要な構成員として認める思想がない。多様性社会は遠い。